

二月十四日。

日本の冬において、もつとも寒さが厳しい時期だが、今日ばかりは私の心も熱く燃え滾たぎらずにはいられない。

なぜなら——今日はバレンタイン・デーなのだから。

お菓子会社の戦略だろうが、意中の相手に告白としてチョコレートを渡す習慣としては形骸化しているようが、そんな事はどうでもいい。

チョコという手段をもって、少女達の普段とは違った一面を堪能たんのう出来る、二重の意味で美味しいイベント。

そこには非などあろうはずがない。

6 戦目

『鼻血のバレンタイン』

私の名前は流遠るとおタオエン。ゾイエス学園高等部の一年生です。

我が家は少し複雑な住人構成で、本来の家人である橘たちばな兄妹と、私を含む流遠三姉妹の計五人で暮らしている。厄介な事に、私を除く女子三人が、唯一の男性であるアサトさんに好意を持っているため、毎年この日の朝は微妙な緊張感が漂う事になる。誰が一番にチヨコを渡しても角かどが立つため、まずは彼に好意のない私が義理チヨコを渡し、あとは各々おのおのが渡すという『協定』が出来ているのだが……『抜け駆けするなよ?』という互いを牽制けんせいしあう空気があるのだ。

「——はあ。やれやれだわ」

学園の正門を潜り、高等部の校舎に入り、一年生の教室がある廊下を進んでいると、私の隣を歩く美少女が嘆息した。

彼女は橘カナコ。

アサトさんの妹で、私にとっては同居人であり、クラスメイトでもある。

長い黒髪と黒瑪瑙オニキスのような黒い瞳。そして静謐せいひつな雰囲気は、今や絶滅危惧種とも言われる大和撫子を体現している。私は無神論者だが、彼女と出会った時は神の存在を信じたくなった。

カナコさんは、それほど奇跡的な美少女なのだ。

「朝から大変でしたね。そんなカナコさんに、これを差し上げます」

私は鞆かぼんに入れていたチヨコを取り出し、カナコさんに渡した。彼女がぼやいているのは、朝のチヨコの一件だ。前述の通り、バレンタインの朝は独特の緊張感が我が家を支配する。

「あら、友チヨコ？ マメね」

「心外です。本命ですよ」

「ヤミヒメとベアトリーチェに渡していたのは？」

「もちろん、本命です」

「じゃあ、兄さんに渡していたのは？」

「——義理ですが？」

「……そう」

私の回答にカナコさんが微妙に苦笑する。彼女にしてみれば好ましい回答だが、一般的な女子としては『それでいいの?』と思わざるをえないのだろう。

私は基本的に男性に関心が薄い。別に同性愛者という訳ではないが、美しい女性の方に惹かれてしまう。なので、カナコさんとも衝突せずに済んでいる。

「綺麗な包装ね。本当に本命チヨコみたいだわ」

白い包装に赤いリボンが掛けてあるチョコを見て、カナコさんがそんな感想を漏らした。疲労回復のために渡したチョコだが、この場で包装を解いて口にする事は躊躇ためらわれるだろう。なので、私は透明なビニールの口をリボンで縛しばった、簡易な包装のチョコを新たに靴かばんから取り出した。

「準備が良いのね」

「いえいえ」

ひよつとしたら必要なタイミングがあるかもしれないと、余分に持っていただけだ。私は包装のリボンを緩ゆるめ、一口サイズのチョコを摘つまみ、カナコさんの口元に運ぶ。

「……自分で食べるわよ」

「あ〜ん」

「いや、だから——」

「あ〜ん」

「……………」

「あ〜ん」

「あ、あ〜ん……」

ようやく観念してカナコさんが口を開けてくれたので、私は摘んだチョコを彼女の口内の赤い舌の上に置いた。口を閉じると、カナコさんは口内のチョコを咀嚼そしゃくしながら、ふいと顔を背けてしまう。その頬ほおはほんのりと赤く染まっていて、普段のクールビューティな彼女とのギャップが堪たまらなく可愛らしい。

「主ハよ、あなたに感謝ルします……!」

「……あなた、無神論者じゃなかった?」

すでに頬の熱は冷め、普段のクールビューティの表情に戻ったカナコさんが呆あきれ顔で私を見ていた。

嗚呼ああ、この少女は冷めた表情も美しい。

「けど、このチョコは本当に美味しいわ。ちよつとお酒も入ってる?」

「はい。ブランデーをほんの少しだけ。生クリームも入ってますね」

「料理上手な同居人がいてくれて助かるわ」

「今のはプロポーズと受け取っても?」

「なんでよ……」

我が家の料理は、基本的に私とカナコさんがローテーションで担当している。つまり、私がいなければ彼女のみになってしまうのだ。一応、アサトさんも最低限の料理スキルはあるが、どうせ食べるなら美味しい方が良く決まっているし、自分の作ったものを美少

女達——一人を除く——が美味しそうに食べてくれるのは嬉しい。

「——ちよつと、あんた達！ な……なに、公衆の面前でいちゃついてんのよ!？」

不意に、廊下に響き渡るような音量で怒鳴られた。声のした方向を向くと、顔を真っ赤にした少女が、わなわなと震わせた指先をこちらに突きつけている。

私達と同じ高等部の制服で、リボンの色も同じ水色。つまり一年生。

長い髪は明るい茶色。切れ長の瞳は薄い緑色。カナコさんの静謐な雰囲気とは対照的な目立つタイプの美少女だ。

彼女は草摩ギリエ。私達のクラスメイトで、何かとカナコさんをライバル視している。

だが、それは明らかに構ってほしいというアプローチで、しかしカナコさんのみそれに気付いていないという、ギリエさんにしてみればなんとも不憫な状況が続いている。

「あ、橘！ なんて無視するのよ!？」

見れば、カナコさんはギリエさんの方を一瞥すらせず、教室に向かっていった。

「ちよつと待ちなさい！ もう……無視しないでよ!？」

ギリエさんの声を背中に聞きながら、私はカナコさんに追いついて隣に並ぶ。

「カナコさん、呼んでますよ?」

「あら。私にはタオエンの声しか聞こえないけど?」

「私しか眼中にないという意味ですね」

「曲解しないで」

「ギリエさん、泣きそうな勢いですよ?」

「……何も聞こえないわ」

結局、カナコさんは鉄の意思で振り返る事はせず、私達はそのまま教室に辿りついた。

「——あ。おはよう、二人とも」
すると、教室に入るなり、私達を迎えてくれるクラスメイトがいた。ゆるふわの黒いショートヘア。とろんとした穏やかな黒い瞳。全体的にのほほんとした雰囲気、可愛らしい少女だ。

彼女は及川ミズキ。私とカナコさんの友人である。

「なんか草摩さんの声が聞こえたけど、やっぱりカナコだったんだね」

苦笑しながら言うミズキさん。それでドアの近くまで来ていたのだろう。

「……『やっぱり』って何よ。草摩の騒ぎを私のせいにしなさいわね」

カナコさんは辟易した表情を浮かべている。

「ねえ、タオエン。なんでカナコ本人だけ気付かないのかな？」

「男子の嫌がらせは好意の裏返しだと、女子は気付かないのと近いのではないのでしょうか」

「……何の話よ」

怪訝けげんそうな顔をするカナコさんを余所よせに、私は彼女に渡したのと同じ包装のチョコを取り出した。

「ミズキさん、チョコレートです。受け取ってください」

「わあ！ ありがとうございます！」

カナコさんのクールな態度とは対照的に、ミズキさんは顔を綻ほころばせて喜びを表現してくれる。素直な人だ。

「じゃあ、私もお返し」

「ありがとうございます」

「タオエンが作ったみたいに美味しくはないと思うけどね」

「とんでもありません。美少女のチョコ、それだけで同じ重さの金より価値があります」

「大袈裟おおげさだよ」

ミズキさんは謙遜けんそんしたが、渡されたチョコは可愛らしくラッピングされており、気持ちが込められているのが一目で判った。

「はい、カナコにも」

「ありがとうございます……二人とも、お返しはホワイト・デーまで待つてもらっていいかしら？」

ミズキさんからチョコを受け取ったカナコさんは、ばつが悪そうに言った。私とミズキさんがチョコを用意していたのに、自分だけ用意していなかった事に気が咎とがめているのだらう。律儀りぎぎなところも可愛らしい。

私とミズキさんは顔を見合わせると、一瞬でアイコンタクトは成立した。

「どうでしょうか、ミズキさん」

「そうだな、三倍返しなら嬉しいかも」

ほんの少しだけ意地の悪い笑みを浮かべて、私達はそんな事を冗談めかして言った。もちろん、カナコさんもそれを判っているので、「いいわ。三倍量のお返しを用意するから、覚悟しておきなさい」と不敵な笑みで答えた。

どうなる事かと危惧していた高等部の生活だったが、私もカナコさんも上手くやれている。それはミズキさんの存在が大きいと思う。私もカナコさんも、コミュニケーションが上手いとは言えない節ふしがあるので、周囲との緩衝材かんしょうになってくれるミズキさんに救われている部分は多分にある。本人はそんな事を微塵みじんも意識していないのだからうけど。

「——なんで置いていくのよ！ 聞こえてたでしょ!?!」

と、教室のドアを勢いよく開くと同時に、ヒステリックな叫びが聞こえた。キリエさんだ。クラスメイトなのだから、同じ教室に現れるのは自明の理。

「草摩さん、おはよう」

「ああ。おはよう、及川さん」

ミズキさんの穏やかな雰囲気^あに中^あてられたのか、すごい剣幕だったキリエさんは普通に挨拶^{あいさつ}を返し、一気にクールダウンしてしまった。

だが——

「橘^{たちばな}！ あんたも挨拶^{あいさつ}くらいしなさいよ!?!」

我関せずと授業の準備を始めたカナコさんの態度に、キリエさんは一瞬でまたヒートアップしてしまった。瞬間湯沸かし器のような人だ。

「……はあ。来年は別のクラスにしてほしいわ」

「それ、フラグっぽいですね」

「うん。絶対、二年生になってもカナコと草摩^{そうま}さんは同じクラスだと思っな」

「冗談じゃないわ」

「ちよっと！ 聞^きいてるの、あんた！ 無視^{むし}しないでっば!?!」

少し訂正。私とカナコさんが周囲から孤立^{こり}せ^ずに^いられるのは、ミズキさんだけのおかげではないかもしれない。

「うるさいわよ、草摩」

「なんですって!?!」

ようやくカナコさんの意識が自分に向いて嬉しいのか、剣幕とは裏腹に、キリエさんの表情は喜色満面^{きしきまんめん}になっていた。カナコさんは、それに怪訝^{けげん}そうな表情を浮かべており、やはり彼女の内心にはまるで気付いていない様子だ。

私は心の中で『キマシ!』と叫び、目の前の光景を心の動画ファイルに保存する。

この二人のやり取りは本当に見^ていて飽きない。美少女が仲良^{はた}く——傍目^{はため}には——じゃれ合う姿は実に眼福だ。それこそ、鼻血が出んばかりに微笑ましい。

「タオエン!? 大丈夫!?!」

急にミズキさんが慌てた様子で私に言った。

「はい。とても充実^{ちゆうじつ}しています」

「いや、鼻血^{はなぢ}出てるから!」

「心の汗です」



「なに言ってるの!？」

すかさずポケットからティッシュを出して、ミズキさんが一枚渡してくれる。こういう心配りが出来るのも彼女の美点だと思う。

嗚呼……! !

素晴らしいかな高校生活!

やはり女子高生は人類の至宝だと思う。

そういう私自身、今はJKなのだが。

Mission complete

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』六戦目をお届け致します。

看板娘のローテーションを考えた際、「よし、今年はゾイエス学園の制服姿を揃えよう」
——そう決意しました。

そんな訳で今回はタオエンの制服姿を描き、ショートストーリーも彼女の主観となりました。タオエンをメインにした場合、アサトとラブコメに出来ませんし、せっかく制服なので学園を舞台にしてみました。

ミズキとキリエが『そーりよくせんっ！』には初登場でしたが、いかが如何だったでしょうか？ JKをいっぱい書いて僕は満足です。まだ一度しか登場していませんが、『ゾイヤみ』とは違った意味で厄介なキリエの魅力を出せればと思っています。もちろん、ミズキも。

それでは謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

カナコが連続出演中ですが、別にひいき最良とかでなく、ツバキやタオエンと絡めやすいんです、ええ。他意はありません。

次は四月のサイト三周年のタイミングですが、ひよっとしたら……。だって制服姿じゃないし、ツバキは正月に描いてるし……ねえ？

あ——でも、ミズキとキリエもイラスト描きたい欲求はあつて……悩ましい。

ちなみに、今回のサブタイトルの元ネタは『ガンダムSEED』です。思いついた時にドヤ顔した自分が恥ずかしい……。

2017 / 1 / 29 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る